

第3回たかいし学校創生基本構想検討協議会会議録

開会及び閉会の年月日時

開会	令和8年8月31日 午後3時00分
閉会	令和8年8月31日 午後5時00分

会議に出席した者の職及び氏名

委員	武庫川女子大学建築学部 教授：中江 哲 和歌山大学教育学部 教授：二宮 衆一 高石市立取石中学校 PTA 会長：東野 真人 関西外国語大学短期大学部 教授：榊田 千佳 高石市立羽衣小学校 校長：松井 洋美 高石市立高石中学校 校長：吉田 種司
事務局	教 育 部 長 ： 石坂 秀樹 教育部理事兼次長：石栗 雅彦 教 育 部 次 長 ： 山崎 陽子 教育総務課長 ： 吉村 智博 教育総務課長代理：水谷 亘 教育総務課係長：大畠 翼 学校教育課参事 ：黒井 将典 有限責任監査法人トーマツ

議題及び議事の要旨及び議決事項

1. 開会

2. 議題

(1) 会議の傍聴について

－	傍聴許可に異議なし。12名傍聴。
---	------------------

(2) 第2回の振り返りについて

事務局	資料説明。
A 委員	今後のめざす方向性について、前回の意見が反映され、以前よりも整理されたと思う。以前あった「知識・技能」については、学習指導要領の根幹部分であり、今回はあえて前面に出さなくてもよいという考えで整理されたという理解でよい。

事務局	ご理解の通り。前回、皆様から「生涯にわたって学び続ける力が大事であること」「一人ひとりの力だけでなく、協働的な学びや主体的な学びなど集団の中で育まれる力も大切であること」といったご意見をいただいた。その中で整理を進めるにあたり、知識・技能については学習指導要領の根幹をなすものであり、日本全国どこでも身につけるべき力であると改めて考えた。そのうえで、高石市として特に重視する力を示すため、今回の整理に至った。
B 委員	整理された内容は非常に分かりやすいと思った。特に「生涯にわたって学び続ける力」は重要だと思う。義務教育を終えた後も学び続けなければ生きていけない時代であり、そこを中心に据える考え方はよく理解できた。 もう1点、「安心して過ごせる」という視点が追加されたことも大変重要だと思う。子どもたちが「やりたいことをやりたい」と思える背景には安心感が必要である。ソフト面・ハード面の両面から考えていくことが大事だと感じた。
C 委員	学校は子どもの生活拠点であるという視点があまり見えない気がした。学びに関する話はたくさんあるが、「学ばなければならない」という印象が強くなりすぎるのではないか。学校は子どもにとっての心の拠り所であり、生活の拠点でもある。前回の検討協議会での、コロナ禍で学校に行ってみんなに会いたいという子どもが多かったことや、テレビニュースでの、災害後に友達の顔を見て安心したという話などを考えると、学校にはそうした役割も求められていると思う。そのニュアンスがどこかに入るとよいのではないかと感じた。
D 委員	PTA 活動を通じて保護者の皆さんと話をする中でも、子どもたちは家庭以外の時間の大部分を学校で過ごすということをお話ししている。学校は単なる学びの場ではなく、生活する場でもある。地域全体で子どもを育てるという意味でも、そのニュアンスが入るとよいと思った。
E 委員	心の拠り所として安心して過ごせるからこそ学びにつながっていくのだと思う。一人ひとりの学ぶ意欲や、他者と協働しながら成長につながる場として、学校を考えられるとよいと思う。施策体系図でも、「安心して過ごせる」ということで、スクールカウンセラーなどについて追記してもらっている。せっかく追記してもらったので、その点がどこかで見える形になるとよいかと思った。
F 委員	先程の生活拠点については同意見である。そこがベースかと思った。今後の方向性のうち「安心して過ごせる、多様な想いを反映した学校づ

	くり」が該当すると思うため、ここに学校生活という言葉が入るとよいと思った。 質問になるが、今後の方向性の 3 つ目について「デジタルとアナログの共生」という表現に変更した背景を説明してほしい。前回はデジタルだけだったと思う。 また、今後の方向性の 1 つ目「挑戦と実践を通じた学びの充実」という表現の下に「自己肯定感や将来への期待感を高める」とあるが、少しつながりが弱いようにも感じた。上の方は挑戦といった非常に前向きな言葉であるため、下も同じようになるとよいと思った。修正版では、目的に「他者と協働しながら」を入れてもらったので、何かしら「他者と協働しながら」といった視点が入ってもよいと感じた。 さらに、構想そのものというより、ぱっと見たときに、楕円で示されている方向性の中で、「まちを元気にする学校」だけ少しトーンが違うように感じた。どちらかというと、以前の「交流の拠点としての学校」といった表現の方が近い印象もある。
事務局	まず生活拠点について、明示的には記載していないが、学校に来てもらうこと、一人ではできないことを学校で経験してもらうことを大切にしたいと考えている。もちろん学ぶ力は子どもたちにつけていかなければいけない力と思うが、生活の中で生きる力を育むという視点は基本構想の中に反映していきたいと思う。 デジタルとアナログについては、ICT 活用も重視する一方で、学び方を子どもたちが選択できることも重要だと考えている。タブレットでまとめる方法もあれば、ノートや新聞などアナログでまとめる方法もある。学習内容に応じて選択できるようにするという考え方から、この表現に変更した。 また、「まちを元気にする学校」については絶対にこれという表現ではない。今後もし意見をいただきながら整理していきたい。
C 委員	好みの問題かもしれないが、楕円の中の文章が全体的に長い印象がある。「まちを元気にする学校」のトーンにあわせる方法もあると思う。キャッチーに、もっと短く、ひと目で伝わる表現にしてもよいのではないか。
F 委員	少し長いという意見が出たが、同様に、目的のうち「学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し行動する力学ぶ意欲を育む」もやや長いと感じる「学ぶ意欲や」から「学ぶ意欲をもち」とする方がわかりやすいのではないかな。

(3) 第1回子ども向けWS・第1回市民向けWS 結果速報

コンサル	資料説明。
D 委員	子どもたちの反応は非常によかったと思うが、むしろ市民向けワークショップの方が重要だと感じる。子どもをどう育てたいか、学校にどんな期待をするかという視点について、大人にも考えてもらう必要があると思う。学校任せではなく、地域全体で子どもの教育を考えるという意識づけが必要だと思うので、そのような取組があってもよいのではないかと思った。
事務局	私たちも学校だけでなく、保護者や地域の皆様と一緒に子どもたちを支えていくことが大切だと考えている 次回以降の市民向けワークショップでは、つながりや学校施設をテーマにする予定である。地域と学校が一緒に考えるきっかけになるよう工夫していきたい。
C 委員	子ども向けワークショップの動画は何分くらいにまとめたのか。
事務局	約7分である。
C 委員	なるほど。子どもたちの付箋を見ると、「学校内でできること」といっても教室の中なのか外なのか、授業中なのか放課後なのか、さまざまな解釈があると思う。「学校外でできること」についても工場見学のようなものから、地域の身近な活動まで幅がある。今後、それらをもう少し整理して把握できると、施設計画にもつながるのではないかと思う。
A 委員	参加者どのような構成だったか。
事務局	中学2年生が3名、小学5年生・6年生が8名であった。
A 委員	付箋の数から、中学生が多いと思っていたが、小学生もたくさん意見を出していて驚いた。
B 委員	内容は素晴らしかったが、安心できる学校という意味では、「どんな場所があったらうれしいか」「どんな空間が欲しいか」といったハード面の意見も聞いてみたいと思った。実現可能性は別として、子どもたちの夢のある意見を集めて、大人に共有するとよいと思う。
F 委員	今後はどのようなワークショップを予定しているのか。
コンサル	これまでに開催したものを含めると全5回構成である。現在は基本構想の段階ということもあり、第1回子ども・第1回市民はソフト面に焦点を当てた。今後の第2回子どももソフト面に焦点を当て、第3回子ども向けと第2回市民向けは「施設・環境」とし、ハード面をテーマとする予定である。
F 委員	第2回子ども向けワークショップのテーマについて、「つながり」といっても、友達同士なのか、先生とのつながりなのか、地域とのつなが

	りなのか様々あるが、そのあたりはどう考えているのか。
コンサル	特定の対象に限定せず幅広く意見をいただく予定であるが、地域とのつながりについては重点的に意見を伺いたいと考えている。
E 委員	学校としても地域とのつながりをもっと深める必要があると感じている。地域の方からも多くのご提案をいただいているので、学校側からも積極的に関わっていききたいと思った。
F 委員	子ども向けのワークショップでは、自分が好きなことから始まって、そこから学びを作っていきたいということが感じられた。これは裏を返すと、今の学校で学んでいることが、自分の生き方や生活、社会との接点として必ずしも伝わっていないのではないかとも言える。学校での学びを、今の子どもたちの生活や社会とどう関係づけていくかが大きな課題だと思っている。個人的には、総合的な学習の時間の中で、本来そうしたことが期待されているのだと思うが、なかなか実現できていないと感じる。 市民向けワークショップに参加された方は、学校との関係性に比較的前向きな方々だったように感じた。一方で、私は大学で社会教育主事講習も担当しているが、社会教育に関わっている方々は地域に出て、地域の人たちと活動したり、地域づくりに関わったりしている方が多い。その方々と演習などを通じて感じるのは、今は地域と学校の関係がなかなか難しくなっているということである。地域が学校を支える土台であるという考え方はよく分かるが、一方で「それは分かるけれども、今は地域側にそこまでの余力がない」「もっと軽い形の連携の方が現実的ではないか」という声もある。また、社会教育の関係者が課題としてよく挙げるのは、学校との連携を支えてきた地域人材の高齢化である。地域で学校との関係を進めてくれる方々が高齢化しており、地域と学校の関係は今まさに難しい局面に来ていると感じている。その意味で、ワークショップでは地域の方々からどのような意見が出たのか、どのような関わり方が提案されたのかについても、ぜひ教えていただきたい。

(4) 有識者による高石市の教育について

有識者	資料説明。
D 委員	スポーツ選手に例えると、先生方は試合ばかりで休む時間がない状況ではないかと感じた。働き方改革や専門職の配置は非常に重要であり、中でもスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの存在は不可欠だと思う。月 1 回程度では十分ではなく、常勤に近い配置

	が必要ではないかと感じた。 研修体制の話を聞いていて、学校の先生は夏休みくらいしか研修に行けないのではないかと感じた。先程の働き方の話とも関係するが、日常の中にどう研修を組み込んでいくかが重要ではないかと思った。市町村格差や学校間格差がどれくらい解消できるのかはわからないが、そのあたりも含めて高石市の基本構想の中で整理されていくことを期待する。
A 委員	「スクールカウンセラーはいらないだろう」と言われた時代もあったが、今は小学校にも配置されるようになっている。全国的に見ればかなり充実している状況だと思う。実際に相談対応などで大変活躍してくれている。 高石市の強みは、やはり一体感だと思う。小学校 7 校、中学校 3 校という規模であるため、横の連携が取りやすい。学校ごとの特色づくりは必要だが、横で連携しながら一定のベースを揃えて教育を進めている。困ったことがあればすぐ他校へ連絡でき、うまくいっている取組があれば見学に行き、それを共有することもできる。こうした高石市のコンパクトなまちの強みを活かしていくことが大事だと思う。 一方で、教員の過重労働は大きな課題です。授業が終わると児童生徒の相談対応があり、その後に部活の指導をし、さらに翌日の授業準備を行っている。そうすると勤務時間はかなり長くなる。部活動をどうしていくかについては、別の場でも検討していきたい。
E 委員	以前勤務していた自治体には 90 校以上小学校があり、その中で横のつながりをつくるのはなかなか大変だった。高石市に来て、自分が困ったときに、同じ学校だけではなく他校の先生にも助けていただけるということを本当に実感している。今は管理職として仕事をしているが、分からないことや困ったことがあったときに、すぐ相談できる体制がある。横のつながりや指導主事とのつながりがあることは大きな強みだと思う。 また、働き方改革や授業準備の話を聞いていて、自分が教員だった頃のことを思い出した。以前いた学校では、教材やカリキュラムを共有してくれる先生がいたり、「こういうことが得意な先生がいる」という情報があったりした。こうした先生同士のつながりを広げていくこともできるのではないかと思う。 高石市は 3 中学校区の規模であるため、中学校だけでなく、市全体で横のつながりを深めていくことができればよいと思う。
C 委員	高石市の教員は 300 人程度と聞いて、建設現場と一緒に感じた。300

	人くらいでどういう組織をつくるかという考えもある。
F 委員	高石市の強みの中身を教えてほしい。 次に、感想になるが、今後は指導要領の流れとして学校裁量がさらに広がっていくのだろうと思う。一方で、日本の学校教育は歴史的に横並びの体制をベースにしてきているため、どうしても横並びにならざるを得ない部分もあるのだろうと思う。前回紹介したイギリスにもナショナルカリキュラムがある。ただし、そのナショナルカリキュラムを教えるのは50%程度までと決められていて、残りは学校で決めなさいという考え方になっている。実際には、学期ごとに半日使って保護者向けに説明会を行い、「今学期はこういうことを学びます」「こういう算数をやっています」といった内容を学校が説明し、保護者に理解してもらう仕組みになっていた。
B 委員	強みというのは、教育内容のここが強いということではない。例えば、中学校では荒れるときはみんな一緒に荒れ、良くなるときはみんな良くなるといったことがある。高石市は市みんなで作っていけるといところが強みだと思う。他市を見ていると、なかなかそういうことは起こらない。 これからの教育は、与えられたことを覚える教育ではなく、自ら作り出していくことが求められている。その意味で学校裁量は重要である。一方、学校裁量を突き詰めすぎると、一人ひとりの子どもを見る余裕がなくなってしまう可能性もある。義務教育としては、ある程度の「高石スタンダード」のような共通基盤も必要だと思う。 また、ワークショップでも出ていたが、好きなことを見つけるというのは実は簡単なことではない。好きなことを見つけて、それをどう学んでいくかを身につけることができれば、義務教育が終わった後も自分裁量でやっていけると思う。そういう意味では、チーム学校というよりも、チーム高石として力を発揮できるとよいのではないかなと思う。
事務局	高石市の強みとは何か、昨年からずっと考えてきたが、今日のお話を聞いて、やはりこれが高石市の強みだったのだなと改めて思った。14年間教育行政に携わってきた中で感じるのは、事務局と学校現場との関係が非常に良いということ。いろいろなことを気さくに言い合え、何かを進めるときには同じ方向を向いて取り組んでいると感じる。 今回の構想としては、子どもたちだけでなく、働く教職員にも元気になってほしいと考えている。教職員がより元気に、より働きやすくなり、その中で子どもたちの教育を進めていければと思っている。いかに持続可能で、前を向いて取り組んでいけるような構想にしていくかが

	重要だと改めて感じた。
--	-------------

(5) 施策体系図修正版及び基本構想の骨格(案)について

事務局	資料説明。
F 委員	基本構想はいつ出てくるのか。
事務局	第4回検討協議会で一定お示しする予定である。
A 委員	教員の働き方改革との関係で、中学校部活動のあり方は盛り込まれるのか。
事務局	中学校のクラブ活動については大きな課題だと認識している。4年前から地域移行や地域展開について議論してきた。今後どういう形にしていくのかについては、事務局としても現在検討しているところである。 この基本構想の中で全く触れないというわけにはいかないと考えているが、どのような形で記載するかは今後整理していきたい。学校教育だけではなく、社会教育との関係もあるため、地域展開という視点も含めながら考えていきたいと思っている。
A 委員	地域を巻き込んだ形で進めている事例も増えているため、そういった事例も参考にしながら進めていけたらよいと思う。
C 委員	「2-3 ハード(学校施設の現状)」という項目があるが、これはコストの話だけになるのか。もちろん学校施設の現状をここで整理しておきたいということは分かるが、昨今の社会状況を考えると、出して大丈夫なのかなという気持ちもある。中間報告ではコストの話もありましたが、その後さらに建設費も上がっている。学校施設の現状について整理していくことは必要だと思うが、それをコストだけで語れるのかという心配はある。
事務局	昨年度の中間報告では、現状の校舎数を維持した場合のコストをお示しした。もちろんその後、建設コスト等も大きく変わっているため、その点も踏まえながら整理していきたい。 また、理想的な学校づくりについては、子ども、市民、教職員、保護者の思いを踏まえながら整理していきたい。加えて、昨年度視察した先進事例なども参考にしながら検討している。
F 委員	第4章の施策部分は他と比較して分量が多くなるように見えるが、今後どういった進め方になるのか。
事務局	ページ数は暫定のものである。施策詳細については、これまでの検討協議会でいただいたご意見を踏まえ、事務局と受託事業者で整理しながら、第4回検討協議会で示せればと考えている。 基本構想の作成あたり、大事にしていることが2つある。1つ目は、

	手に取って見やすいこと。2つ目は、デザイン性のあるものにすること。第2章の「高石市のいま」は、現状説明であるため文字中心になると思う。一方で、第3章、第4章については、ハード面でこういう学校、ソフト面でこういう教育ということが、ぱっと見てイメージできるようなものにしたいと考えている。イラストやイメージを使いながら表現していきたい。
--	---

(6) その他

事務局	資料説明。
-----	-------

3. 閉会

以上